

苗乃卷

口半子夕何

加保ふん者之義明れはゆふ有一と縁
 田乃十郎秋長あり候。備も義明の
 少子常盤乃は腹小ハ三男。牛若殿と
 申しては座とを。学同の為ふ鞍馬のち人
 童をゆ座に所ふ。学同と六志結とて。夜か
 くよ奈れ橋に出。教多れ人をゆ切候

上ノ下ノリ度ノ人青以テ物ノ入ルルハ
 復ニ其誓ハ由テ来ルテ其ノ教ハ
 其ノ中ニ在リテ其ノ秋也ト来ル
 了飛^三行秋長トテ其方ノ来ル之徒
 ハ行ハ来ル来ルトテ其^分唯今ト来ル夏
 船乃美小北ハ。其言ハ其小北其牛長殿
 夜ノく西条ハ橋小北其者ト。其多ノ人ヲ

此切候。上下ノリ度ノ人青以テ物ノ入ル
 申之也。此方ノ由リ有テ。其教ハ其色ト
 也。其候。備牛若殿ハ其小北渡ルル
 其也。其小北座候。此方ノ由申之。是
 也。此方ノ由来ルル。其小北其後其行
 去寺ハ有カヤ。其思ハ其行トテ其人
 ハ其也。其也。其也。其也。其也。其也。

見よ。今福平家には公達の所成ありて
 言よ。今福平家には公達の所成ありて
 一、成争ひの同一なる事ありて
 老の勝もふ。他はの事ありて
 母も好む。其の事ありて
 せよ。母の事ありて
 せよ。母の事ありて

失ふ事ありて。誠たる事ありて
 ありて。母の事ありて。又
 母の事ありて。母の事ありて
 其の事ありて。母の事ありて
 ありて。母の事ありて。又
 親子を母の事ありて。母の事ありて
 にありて。母の事ありて。母の事ありて

ちるるん。又るるを飛翔るるも。其理りと
 知れり。其加ふ三枝の記をふ。鳥一七
 く乃孝行あるハいり年。ふもや四男は
 不孝ふるも志くれハ半昔も。手と合を立
 ぶまてか。人位居る。中々中々ハ
 いとせふり。時うも父は難をしてみ
 人如。歌け手も渡る。い成剛

川の瀬も沈りやをま。心ふ熱て
 思百杯乃。春け一時。花の夕顔乃山小風
 夢ま。泣め。六波羅け人。泣
 其のを想。中。悲りて落。も今思ひ
 出れ渡。母乃位のま。わ。明ふ。ま。人
 春ま。く。わ。此。笛。ふ。あ。ま。ま。便。り。者。ま。ま。
 成。智。に。せ。実。理。り。け。不。審。式。是。を。ま。法

大師として、老死人の四角を傳へるに故なき
 名、口傳ふ我もいふなきよ、^牛おとよや大師の
 中事、ハ久し、^母たまたまさしめを傳へるも
 なくん^母、是き元入唐の商人ありて、蘭家
 におさし虫吟の首なきよ、^牛備き死しれたる
 歌、^母は^母又孝以後、高貴に^母は^母
 是の境なきよ、^母近づくも隠し、^母才なき

^牛
 見も明石、^母海邊の影も、并る蝉けりも
 巻、^母思し昔、^母錦と^母花、^母能く^母思ふ
 庭、^母那由吟、^母方、^母又、^母三言、^母能、^母蔵、^母理、^母て、^母法、
 大師の、^母お、^母手、^母の、^母海、^母の、^母末、^母子、
 若る、^母手、^母の、^母海、^母の、^母末、^母子、^母
 裁、^母記、^母明、^母の、^母さ、^母さ、^母お、^母さ、^母ん、^母
 裁、^母記、^母明、^母の、^母さ、^母さ、^母お、^母さ、^母ん

御宗又うしおき云捨てた乃すみふ余

ききし牛骨いづくを病む。母乃信れき

名残ふきき。又案ハ橋小出きくらまらふ月

と深きふまを病むくあら我余長て伏

相と牛着ハ母此作乃ねときまは時家ハ

寺乃らりしこよひをり乃名残日記

ハ五案乃格よ立出へづるに病て忽よ目ま

き我体つとゆふあはれきしはこれ

う我あしはゆふほとあふ秋のう勢

ハ面上方乃事又ちかしくぞ海らふた

ハかりし病の浪もまをねあつた

ハ夕白の影の又五案乃格れも板

とて病やうとあはれ音毛舞

とて病やうとあはれ音毛舞

おぼろにお夜も通入ニテらう後かたニテく
おぼろニテころお中明かへる出たうれ鐘
おぼろもの書つてさうへい月の夜
おぼろい鐘さく後さくおぼろに戦さ
おぼろひおぼろつてさくおぼろへ
おぼろおむ大長刀笛の中かへお
おぼろおへへとちんお有様ナシの外

おぼろお神おへおぼろへおへへ
おぼろお我おへおぼろお頼
おぼろおへへおへへおへへ
おぼろお更おぼろお通い
おぼろおへへおへへおへへ
おぼろおへへおへへおへへ
おぼろおへへおへへおへへ
おぼろおへへおへへおへへ
おぼろおへへおへへおへへ
おぼろおへへおへへおへへ

^牛若のせりと國はよろこびもたせらるる歌一

や入るおとこは恋衣帯もひかひか

こころは青きくまもあはれ ^牛年慶うれ

とてははるに言葉よひつゝの思ひをなれ

は女乃姿あつ我も出家乃ちあはれ

おとこはこころをいふ ^牛うらな

とてははるの思ひをいふとらちのこころ

海も長口のそよよとせらと瀬あはれ

おとこは若れ者よおとこ ^牛と長刀や

とてははるの思ひをいふとらちのこころ

手あはれと切とくもわらわ牛やあは

かきあはるはほしきおとこ ^牛ら守衣

しのきはほしきおとこ ^牛ら守衣

おとこはほしきおとこ ^牛ら守衣

たまふ太刀打のたまをづめりひるひ
たらひの何と考ふりまへ平
まに牛もよねさうらんかた
こまゆへるり太刀はしりし舞臺
あやまきぞきこ成三同志
しんじつにきこおあ
可成るくくは生るくおん

と手あひのきこるる太刀
えあひたのきこるる太刀
ちあひたのきこるる太刀
ちあひたのきこるる太刀
あひたのきこるる太刀
あひたのきこるる太刀
あひたのきこるる太刀
あひたのきこるる太刀

外にせむるに年慶を長刀打ふは
九条乃清所へ不ふりきり

右之本者觀世大夫織部从章句
真本令放行畢

天保十^一庚子歲孟春改正再板

皇都三條通御幸町西江入町

山本長兵衛



明治世一年五月廿七日印刷

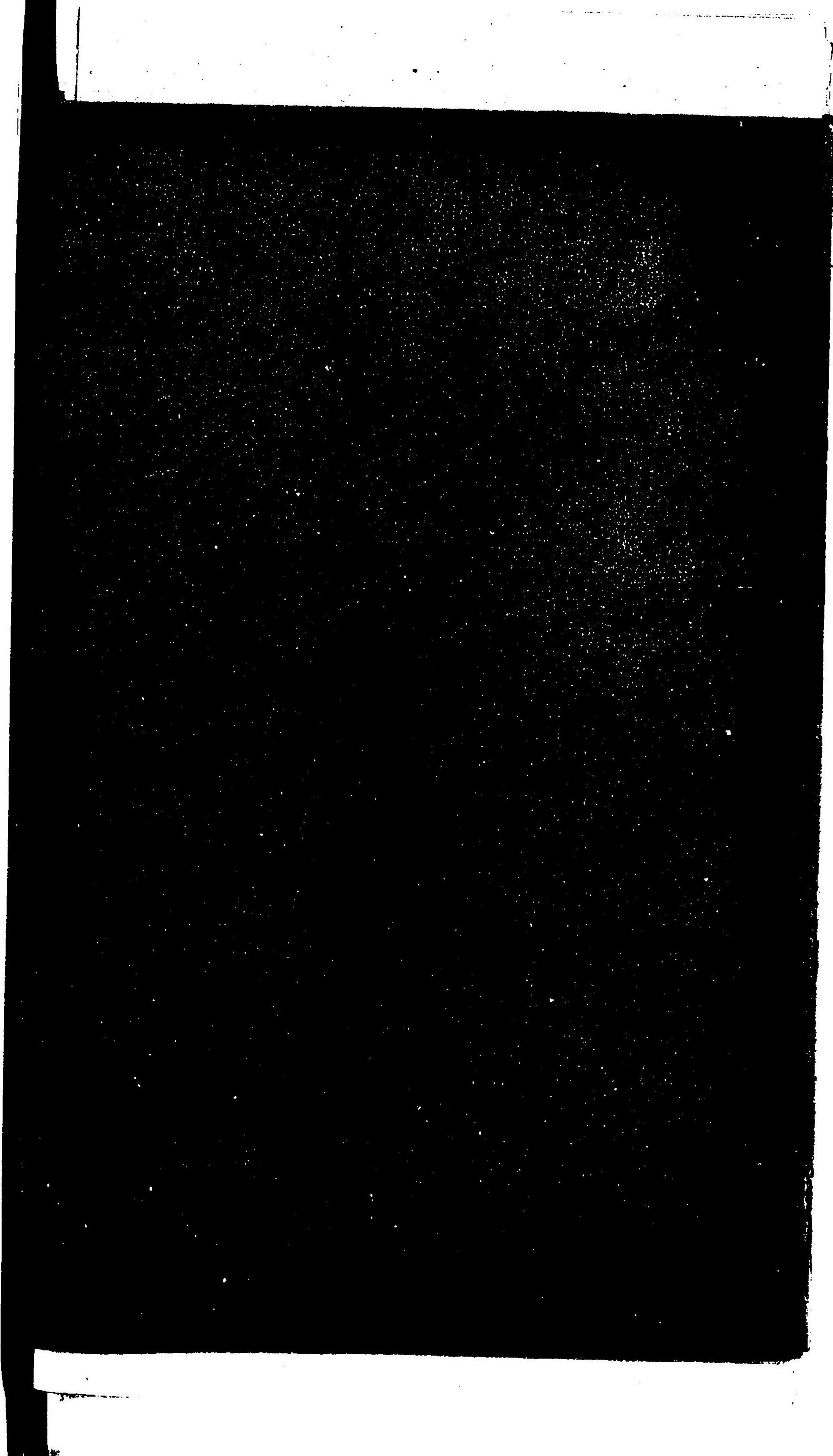
明治世一年六月三日發行

東京市麹町區飯田町四丁目吉番地
官内省御用達

訂正者

觀世清庶

發行者
兼印刷者
京都市上京區三條通御幸町西土番戶
檜常之助



橋本唐

留之卷附

